

1 アジア経済

- (1) 市場の開拓・拡大（マーケットとしてのアジア）
- (2) 県内企業の海外展開（企業の進出先としてのアジア）
- (3) 競争に打ち勝つ産業への転換（競争相手としてのアジア）
- (4) 外国人の受け入れ体制の整備（パートナーとしてのアジア）

2 環境・新エネルギー

- (1) 新エネルギーを活用した自動車・電池関連産業の振興
 - (2) 太陽光発電を新たなビジネスモデルとして展開
 - (3) 岡山県の豊かな資源を生かした自然エネルギーの活用
- ★ 環境
- ★ 新エネルギー産業の振興

3 医療・福祉・健康

- (1) 医療の集積・高度化・産業化
- (2) 医療の国際化
- (3) 介護負担を軽減するためのロボットの活用
- (4) 機能性（美容、健康、長寿）をプラスした食品の開発

4 中山間・農林水産

- (1) 中山間地域の基礎的な生活圏の確立
- (2) 中山間地域の経済基盤の確立
- (3) 地域をリードする人材の育成
- (4) 農業の企業的経営
- (5) 林業の再生

5 人材育成

- (1) グローバル人材の育成
- (2) アジアの高度人材の受入
- (3) シニア人材の活用

6 その他

- (1) ベンチャーの育成
- (2) 岡山のイメージ
- (3) 情報発信

1 アジア経済

(1) 市場の開拓・拡大（マーケットとしてのアジア）

- 特定の国や都市をターゲットに、個々の技術ではなく、システムでアプローチしていくことが必要である。
- 中国の内陸部は、3～4年後には今の上海のレベルに達するということで、日本の企業間で非常に注目されている。
- 新興国で一番悩ましい問題は水の問題。水ビジネスは日本全体でこれから大きく伸びていく一つの分野である。
- 岡山の果物はかなりのブランディングができています。今後は、岡山の農産物、お米、お酒を含めてアジアに売り込む必要がある。
- 日本の水は品質もいいし、おいしい。アジアは、硬水よりも軟水の方が合うので、岡山の豊富な水をアジアに売っていくことが必要である。

（具体的な施策の例）

- ①日本の水道局の漏水管理の技術や水道オペレーションのノウハウ、日本の逆浸透膜などの単体技術を組み合わせた水ビジネスの売り込み
- ②パッケージ化した「農業システム」の輸出
- ③岡山の農産物、米、酒、水のアジアへの売り込み

(2) 県内企業の海外展開（企業の進出先としてのアジア）

- 海外投資はどの国でもリスクがある。
- 中国には県内企業136社が進出し、180事業所を設けており、今後こうした企業と現地の中国の企業との間で部品調達、販売などの形での関わりがますます増える。岡山県として、対中国、対アジアビジネスのサポートは今まで以上に重要である。
- 海外の生産拠点では必ず経験のある日本人が監督している。こうしたコアになる人材を育てる努力が必要である。

(3) 競争に打ち勝つ産業への転換（競争相手としてのアジア）

- 石油化学においては、中東や中国、アジアで大規模生産設備の増強が進んでいる。水島コンビナートが、国際競争力に打ち勝つためには、高付加価値化等への転換を図る必要がある。
- 加工組立中心の製造業の強みを生かしながら、川上と川下にバリューチェーンを構築して展開していくことが重要である。新たなニーズを踏まえて付加価値の高い新製品を開発していくことが必要である。
- 生産現場が海外に移っていけば、それに併せて部品メーカーもついて行かざるを得ない。いかに日本に生産を残すかが重要となる。
- 中小企業も海外に進出し、その利益を日本に還元して、次世代の電気自動車の部品などの研究開発に回していくサイクルを作ることが必要である。
- 今後、物流の重要性が増してくる。水島港をはじめとする岡山県の物流機能を強化し、全国、アジアへ発信することで、動脈物流だけでなく静脈物流を含めた発展戦略を描いていく必要がある。

(4) 外国人の受け入れ体制の整備（パートナーとしてのアジア）

- 岡山に留学生、看護師とか介護福祉士、観光などあらゆる面で外国人が来てもらえるような体制整備をすることが大変重要である。
- 外国から見て、「岡山県は外国人が行きやすく、観光しやすい所だ。」というインパクトを作ることが重要だ。そのためには、ゲートウェイである岡山空港をグローバル空港に変えていく必要がある。

（具体的な施策の例）

- ①外国人に対するサービスの向上（空港での両替、クレジットカード利用、レンタカー等）

2 環境・新エネルギー

(1) 新エネルギーを活用した自動車・電池関連産業の振興

- 岡山には電気自動車を含めた自動車産業の集積がある。
- パリでは、大量の電気自動車と充電設備を整備し、レンタルで好きな時に借りて、好きな所へ返せる「オートリブ (Autolib)」という交通システムを導入しようとしている。
- 電気自動車の貸出、ライトレール (LRT) の導入、環状化など環境に優しい、新しいエネルギーを使った交通システムの整備に取り組む必要がある。
- エネルギーは、今後、電気一元化される。電力供給は現時点では原子力だが、その後、太陽光の効率アップにかかっていく。また、電気をいかに持ち運びするかが課題である。
- 蓄電池の市場は2018年には18兆円規模になる。これは車産業くらいのボリュームがある。蓄電池を使って、家庭での太陽光発電を平準化することもできる。

(具体的な施策の例)

- ①次世代自動車として、水島の製鉄所・精油所から副生されている水素を活用した水素燃料電池車の開発

(2) 太陽光発電を新たなビジネスモデルとして展開

- 太陽光発電事業は広大な土地が必要であり、土地に余裕がある地方に向けた産業である。岡山は晴れの日が多いので、メガソーラーも検討する必要がある。
- メガソーラーの設置は、住居や農地として活用できないような場所を有効利用すれば一石二鳥となる。
- 市民から出資を募ったファンドを活用して初期投資に充てるビジネスモデル (オンサイト発電) がある。
- オンサイト発電の課題は、ファンドを集めるところなので、公共団体、リース会社、銀行等と協働し、電力会社も巻き込んで、雇用と産業が生まれるような仕組みをつくる必要がある。

(具体的な施策の例)

- ①アパート、マンション等太陽光発電を設置することができない人達から出資を募り、県がメガソーラーを設置し、売電収入を市民に還元する「市民メガソーラー制度」の創設

(3) 岡山県の豊かな資源を生かした自然エネルギーの活用

- 中山間の耕作放棄地などを森林に戻し、バイオマスエネルギーに取り組めば、搬出もずっと楽になり、木材の生産コストも下がる。
- 「再生可能エネルギー導入ポテンシャル調査（平成22年3月）」によると、岡山県内における小水力発電の賦存量は50MWある。

（具体的な施策の例）

- ①山林の林地残材を利用する木質バイオマスの岡山ルールの確立
- ②耕作放棄地となっている中山間地域の棚田への太陽光発電施設の設置
- ③街灯等の電力を賄う、街中の水路を活用したマイクロ水力発電の設置

※追加で意見をいただきたい項目

★環境

★新エネルギー産業の振興

3 医療・福祉・健康

(1) 医療の集積・高度化・産業化

- 先端医療分野は岡山の強みを発揮できる可能性が高い。
- 患者満足度の高さを岡山県全体に広げて、岡山ブランドとして発信したらどうか。
- 医療圏ごとに医療事情は異なるため、二次医療圏ごとに、医療と介護の需要・供給を分析し、課題に対応することが必要である。
- 今のビジネスモデルは世界的な集積規模を作らないと勝負できないので、交通の結節点を生かした医療の集積を考えることが必要である。
- 医療も医師だけの時代は終わり、病院経営、医療トラブルにかかわる医療弁護士などの集積が必要となる。
- 医療を産業としてとらえ、民間参入を進め、雇用を生み出すことが必要である。

(具体的な施策の例)

- ①各圏域で、地元の総合医→専門的病院→大学病院等というシステムの整備
- ②診療所と介護施設がコンパクトな空間にある、医療と介護をセットにしたシステム整備
- ③岡山大学医学部といろいろな医大との広域連携による、学生や患者の相互移動システムの構築
- ④岡山大学やブロック内の大学の文系のプログラムとの連携

(2) 医療の国際化

- 介護、福祉、医療を産業として充実するためには、輸出する開国とともに、人を受け入れる開国が必要である。外国人労働者、移民等を受け入れる政策転換が不可欠である。
- 医療には、IT技術への取組やグローバルな視点が必要である。「日本人のための日本人による日本の中での医療」では限界がある。
- 医療ツーリズムに取り組むのであれば、医者、看護師もある程度は外国人を入れる必要がある。
- 医療ツーリズムで外国の患者を診るより、県内の南北格差の解消の方を優先すべきである。

(3) 介護負担を軽減するためのロボットの活用

- 介助・介護はこれからますます必要になる。子育て、介護を全体的に、地域全体で支え合う仕組みづくりが重要である。
- これからは介護ロボットだ。大きく、①補助具として、②見守り、③コミュニケーションの役割が考えられるが、特に認知症の患者などの介護・見守りは需要がある。
- 身体機能を拡張、増幅、強化するロボットスーツが既に開発されている。
- 人間の会話の間合いをはかり、「うなづく」コミュニケーションシステムの研究が進んでいる。今後、認知症の介護の分野での活用についても研究が進む予定である。

(具体的な施策の例)

- ① 「うなづく」の機能を備えたコミュニケーションロボットの開発による認知症の介護負担の軽減

(4) 機能性（美容、健康、長寿）をプラスした食品の開発

- 岡山県は医療機関が集積していて連携を取りやすいということを考えると、医療機器、健康食品、化粧品などは優位性がある。
- 岡山のアグリ分野の強みは「おいしい」という品質面の強みはあるが、機能性（美容、健康、長寿）の面での展開が足りない。
- 女性、アンチエイジングを視野・視点に入れて、付加価値が付いたものを作っていくことが重要である。

(具体的な施策の例)

- ① 岡山のアグリ分野のブランドを生かした機能性食品の開発
- ② 全国販売を展開するための食品産業等との連携

4 中山間・農林水産

(1) 中山間地域の基礎的な生活圏の確立

- 中山間地域の住民にとって「医療・福祉」は生活の要である。現在、中山間地域のお年寄りが、その土地を離れず住み続けることができる環境整備が必要である。
- 1000人以上の地域には、基礎的な生活を営むのに必要な、小学校、医療機関、商業施設の3点セットが残っている。逆に、1000人未満は基礎的な生活圏としては成り立たなくなっている。基礎的な生活圏の再設定が必要である。

(具体的な施策の例)

- ①小学校区等の基礎的な生活圏ごとに、医療、商業、教育等地域内外をつなぐ様々な機能を一カ所に集約し、地域の人、モノ、金、情報をつなぐ「ハブ」として機能させる組織の整備
- ②かかり付け医と総合病院のバランスのとれた整備

(2) 中山間地域の経済基盤の確立

- 昔、田舎には食物、衣料、住居を地域内で生産、消費する内部循環があったが、今はこの経済システムがない。地域内で経済が循環するシステムを作り、その上で、ロットの揃うものは地方都市に出荷し、外貨を稼ぐことが必要である。
- がんばっている地域は、農林水産業、あるいは農林水産資源を活用した地域づくりを模索している。
- 起業活動による農産加工物の販売は、伸びている分野であり、地域雇用にもつながっている。小さな収入、小さな雇用かもしれないが、小規模地域にとっては大きな意味をもつ。

(具体的な施策の例)

- ①内部循環の資金となるコミュニティファンドの創設

(3) 地域をリードする人材の育成

- 地域のリーダーは固定化しており60～70歳が多く、次の世代に受け継がれていない。
- 複数のリーダー、新しい世代のリーダーを育てることが大事。育成のターゲットは30代、小学生である。
- 集落や分野を横断し、行政や都市との間も含めて柔軟に「地域のつなぎ役」をこなす組織や人材が重要である。
- 集落内の人材を、県が養成している地域アドバイザーとして育成することは問題点が多

い。集落アドバイザーの専門性を高め、外部人材をプロとして育成し、外からの新しい考え方を入れることが必要である。

(具体的な施策の例)

- ①子ども達に古里をなくさないために何をすべきかを考えてもらうための小学校と地域との交流促進
- ②30～40代の若い世代へのインターネットを活用した特産品、販路開拓等のノウハウなどの提供
- ③地域内での商業活動（情報、交通、配送、観光案内）をマネジメントするとともに、域外の消費地（団地等）との連絡役を担う組織、人材の整備

(4) 農業の企業的経営

- 大規模な農業、効率のいい農業を目指し、世界への輸出を視野に入れた取組を進めることが必要である。
- 農商工連携の取組を推進するとともに、「流通」については抜本的な改革が必要である。

(具体的な施策の例)

- ①農業への企業の参入の促進
- ②家畜飼料の化学工場での生産
- ③好適環境水を使用した、内陸での魚の養殖

(5) 林業の再生

- CO₂の25%削減と両立できる産業は林業しかない。今育っている森林を伐採し、その後植林すれば、若い木はCO₂をどんどん吸収するので、CO₂削減につながる。
- 国産材が使われないのは、単価だけの問題でなく、必要な時、調達できないことだ。山にはあるが、建材として準備できない。

(具体的な施策の例)

- ①住宅メーカーの求める部材、ロットを確保するため、県産材の集積加工センター基地の整備

5 人材育成

(1) グローバル人材の育成

- アジアの事業を取り込む、競争力を取り戻す場合、ベースとなるのは人材の育成である。
- 海外から人材を受け入れるだけでなく、海外へも出て行く双方向での交流を目指すべきである。
- 就職氷河期と言われているが、日本語ができる留学生は日本人より就職の可能性が高い。
- 中国で成功している日本の中小企業の一つの傾向としては、社長の懐刀的な中国人が必ずいる。彼は、日本に留学して、日本語も流ちょうで、中国のこともよく分かっている。
- その地域で教育を受けた外国人は、その地域とのつながり、文化などへの愛着が他からやって来る人よりも強い。岡山に留学した人や、岡山のファンになった人をそのまま母国に帰すのではなく、そのまま日本で雇用することも必要である。
- 最近の日本人は内向きになっていて、国際機関・国際会議でのプレゼンスが低い。英語が話せなくては日本人の能力が海外で生かされない。

(具体的な施策の例)

- ①海外からの留学生を多く受け入れ、異文化との接触の機会の増加
- ②地元企業による募金で基金を創り、基金を利用した学生に、優先的に企業がアプローチできる制度の創設
- ③英語を公用語とする学校や海外研修を必須とする学校の創設
- ④大学に海外から先生を多く招き、英語による授業の実施

(2) アジアの高度人材の受入

- アジアの中産階層の高度人材は、英語、中国語、母国語を話せることが要求されており、世界的にみても優秀な科学者やエンジニアが育成されている。日本での教育や就業の機会を通じて、これらの人材を取り込んでいく必要がある。
- 日本語を話せなくても生活できるくらいの環境を整備し、世界中から高度人材を受け入れるべきである。
- グローバルに人材を集めると、国内の人材も強くなる。

(3) シニア人材の活用

- 日本の中で技術をもったシニアを活用する視点を広げていくべきである。
- 高齢者となる団塊の世代を活用することが必要である。
- 65～80歳までの就業率は下がり続けている。日本の企業に高齢者の活用を期待することは難しく、高齢者が働くことのできる組織の多様化を進めなければならない。

(具体的な施策の例)

- ①ローテクを含む創業支援について、技術、知見を持っているシニアのアドバイザーとしての活用

6 その他

(1) ベンチャーの育成

- バイオ系のベンチャーは成果に結び付くまでに長い時間がかかるビジネスである。ファンドによる支援と、息長く見守る姿勢が重要である。
- 子ども、老人のケアなどについてビジネスとして、いろいろなところで取り組んでいる。岡山でも、商店街の活性化に結び付けながら関わる人を増やし、内発的なローテクベンチャーを育てる意識も必要である。
- ベンチャーの育成は、日本全体の課題である。新興市場が崩壊している現況では、ベンチャーの資金調達は容易ではなく、県独自のファンド、融資、補助金があれば、関東、関西の企業を本社ごと誘致することも可能になる。
- 地域の中小企業がグローバル企業に飛躍できるよう、エクイティファンド、地域ファンド等の充実が必要である。

(2) 岡山のイメージ

- 今は高度成長期のように、日本全体を底上げしていくという時代ではなく、地域が先導する形で引っ張っていく時代となっている。どの地域が何を引っ張っていくかが今一番問われている。
- 岡山県は素晴らしい資源に恵まれている。だが、十分に生かしているだろうか。また、岡山県のイメージは何だろうか。これについて、戦略会議を通じて真剣に考えていく必要がある。

(3) 情報発信

- 大阪、関西からみたら岡山は「美しい」、「住みやすい」。そういう特長を前面に出して進めることが必要。また、岡山空港の利便性が知られていない。岡山でやっていること、優れていることをもっとPRする必要がある。